

一番後のに乗らす。

『まあ人の世は淋しいものだ、あの向ふの川にも娘が一人投身した。』

『見なさいお母さん、あの松の木は枝ぶりが好い』とか乗客の中にも、俺に同情して話す奴がある。

何處かの驛で俺は又下車した。

尾行が交替するのだ。

俺は二等室に這入つて横になる。

ダマダマイストもあまりやらなかつた。

『餓頭を持つて来い』

驛の賣子に餓頭を持つて來させて、金を拂はないのだ。

中佐か少將かのいかめしい軍人が、俺が亂暴しては不可ないと思つてか、汽車が着く度にブラットホームへ飛び降りて、警戒の任にあたる。

俺は客室の行きたい所へ行つて掛ける。